

路上観察家としての林丈二さんを振り返ります。

1998年

11月14日・・・中央区

1999年

2月20日・・・千代田区  
7月25日・・・台東区  
9月5日・・・港区  
9月23日・・・文京区  
10月28日・・・新宿区  
11月8日・・・豊島区  
11月26日・・・江東区

2000年

6月7日・・・渋谷区

2001年

2月5日・・・墨田区

2003年

10月11日・・・品川区  
12月4日・・・葛飾区・江戸川区

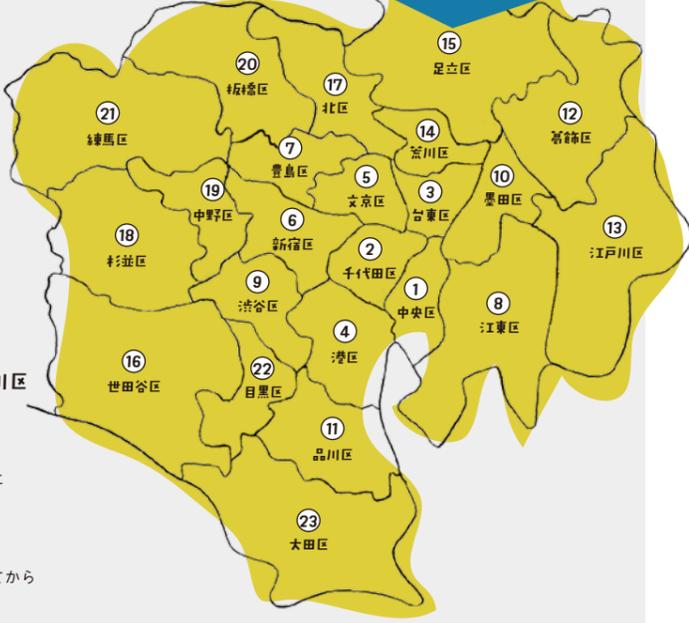
注 最初に路上観察的な見方で23区を歩き出したのは「マンホールのふた」出版に向けた1982年から

注 「路上観察家」としては、1986年6月10日に「路上観察学会」が発足してから

2004年

1月3日・・・荒川区  
1月9日・・・足立区  
2月10日・・・世田谷区  
2月20日・・・北区  
3月5日・・・杉並区・中野区  
3月26日・・・板橋区  
4月26日・・・練馬区  
5月25日・・・目黒区  
5月28日・・・大田区

林丈二さんが路上観察家として東京23区を初めて歩いた日マップ



林丈二さんの路上観察スナップ名作選



「ニワトリテレビ」  
1982年4月10日撮影  
北区にて



「ニワトリバット」  
1983年1月撮影  
荒川区にて



「眼鏡屋の目」  
1983年11月21日撮影  
品川区にて



「自転車ドレス」  
1986年11月27日撮影/台東区にて



詳細ページ 林丈二 あれもこれも展  
2022.11.2 wed. - 6 sun.  
12:00-20:00 ※林丈二さんの在廊は18時まで

スライドショー お申し込み

- その1: 路上観察家・目黒区の愉しみ
- その2: 「毎日グラフ」と「サライ」
- その3: 「旅の絵日記」から

※スライドショー開催中は、ご予約のない方の入場は一部のみの観覧とお時間30分以内とさせていただきます。あらかじめご了承ください。

SUTPAPER Vol.5  
発行: SUT (Space Utility TOKYO) 2022.11.02  
企画・制作: 東京ピンボンデザイン室

〒153-0061 東京都目黒区中目黒3-5-3  
03-4400-5038 / time@space-utility.com

「あれもこれもやってみたい帖」から、2005年6月23日(木)に実践  
「産医者さんの待合室」連載(2005年6月23日)

一日で東京の23区を歩く

1985年六月二十三日(木)  
一番長い道を歩くと、二十三日にやろうと思いましたが、二十三日は雨で、これはすべて徒勞なので、かなりハードになるはず。今まで五万五千歩は歩いたことがあるので、まあ何とかやる予定。ということで、練馬区の江古田駅を四時五十分に出発。くもり、雨が降りそうだが、少し心配。

全歩数78025歩

林丈二/はやしじょうじ

路上観察家、イラストレーター、エッセイスト、そして明治文化研究者。小学校時代からの調査マニア。

1947年 東京練馬区に誕生

1968年 武蔵華入学/カメラを構えた街歩きを知る

1970年 11月12日 マンホールの蓋 初撮影・釜玉水道

1972年 2月29日 何かにみえてしまうもの初撮影

1981年 母の死をきっかけにマンホールのふたの出版を決意

1984年 マンホールのふた(日本編)出版・話題に

1986年 路上観察学会を創設。赤瀬川、南、松田と設立

2006年 第10回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館/路上観察 参加

Special Feature 林丈二

半瀬川の中流の村

「あれもこれもやってみたい帖」から、2005年6月23日(木)に実践「産医者さんの待合室」連載(2005年6月23日)

一日で東京の23区を歩く

1985年六月二十三日(木)  
一番長い道を歩くと、二十三日にやろうと思いましたが、二十三日は雨で、これはすべて徒勞なので、かなりハードになるはず。今まで五万五千歩は歩いたことがあるので、まあ何とかやる予定。ということで、練馬区の江古田駅を四時五十分に出発。くもり、雨が降りそうだが、少し心配。

全歩数78025歩

## SPECIAL INTERVIEW

林 丈二さん

Interview:Hajime Shimizu

Text:Rika Watanabe

Photo:Ryo Inoue



2022年9月21日/アトリエからの景色

林丈二さんの肩書きって何になるのでしょうか。文章も書けば、イラストも描く。明治文化研究家であり、路上観察学家でもある。若いころ、実家の医院を継ぐことを拒み、思い立って武蔵野美術大学に入学。キャンパスで出会った奥さまと、言葉がかわさないまま直感で結婚を決意。せっかく入社した〈サンリオ〉を辞めて、好きなことをとことん追求していく。これぞ、まさに、インスピレーションの人。つまるところ、林丈二さんは林丈二さんたるべく生まれてきたんですね。

## 1

やりたいことは、いまやらなくちゃ。  
そう思うようになったのは、母の死がきっかけ。

林丈二さんといえば「マンホールのふた」を思い浮かべる人も多いと思います。どうして惹かれるようになったのでしょうか。

〈サンリオ〉を退社してからフリーのデザイナーになったのですが、しばらくして母が亡くなったんです。58歳という若さで。母は医者家に嫁いで、ずっと家と医院を切り盛りすることにかかりきりだった。自分のやりたいことも、きつとあったでしょう。でも、できなかった。でね「急がなきゃ!」と思ったわけですよ。僕だっていつまで生きられるかわからない。それなら、好きなことをして生きていこう、と。

マンホールの蓋の写真は、実は学生時代から撮り始めていました。古本屋で買ったデザインの本に、マンホールの蓋の写真が何種類か載っているページがあって、おもしろいな、と。自分で撮った写真はいつかまとめて本にしたい、とは思っていたのですが、そんな悠長なことは言っていられない。だって、その前に死んじゃうかも知れないんだから。で、仕事を続けながら、1年かけて日本中を歩き回って一気に撮影しました。もう休みも何もなかったですね。テレビもいっさい観なかった。

本にするために、最初は大きな出版社に掛け合いました。でも「マンホールのふたなんて」と言われてしまって。そしたら、知り合いの小さな出版社の人が「面白そうだからうちでやろう。マンホールのメーカーさんにスポンサーになってもらおう」と。で、日本でいちばん大きい〈日之出水道機器株式会社〉って九州のマンホールのメーカーに行ってみたら、そこの部長さんが、マンホールの蓋の歴史に関心がある人だったんですよ。たまたま。それで販売促進用に1,000冊だけつくることになりました。



「マンホールのふた(日本編)」1984年3月30日

## 2

マンホールの蓋から、路上観察へ。  
「おっ!」と感じる、その中に自分自身がある。



「マンホールのふた」がきっかけで、路上のさまざまなものに興味を持ったり、いろいろな人とつながりやすくなったんですね。

マンホールの蓋の写真を撮って歩いているときに、地図を使ってマーキングして行きました。同じところを歩いて無駄な作業をしなくていいように。でもね、マンホールの蓋以外にも、面白いものがあるんですよ。路上には、気を取られないようにしてはいたんだけど、どうしても気になるものが出てくる。そのひとつが「ニワトリ・テレビ」です。壊れたテレビの中で飼われているニワトリがいて、生き物だから、いま撮っておかなければ死んでしまうかも知れないでしょ。で、シャッターを切った。それが今という路上観察的なものにつながっています。

その後、地図をたどって東京を歩こうと思いついたわけですが、調べてみたら23区内で歩ける道1万1,000キロ



「ニワトリ小屋テレビ」1982年4月10日撮影、東京都北区にて

くらいで、毎日10キロ歩けば3年半くらいで歩けちゃう。とはいえ、実際には365日そんなことばかりしてはいられない。いまはその8割くらい歩いたかな。でもね、目的は、歩くことじゃないし、地図をたどることでない。なに面白いものを見つけたら、そしてそれを楽しむ。感覚としては、道草なんですよ。たとえば、写真を撮るにしても、ただ言われたままのものを撮る人もいます。それが悪いわけじゃなくて、ほかの人は違うものを見つけて表現したいなら、自分が惹かれることを探さない。結局、僕は誰かのために何かをやっているわけじゃなくて、自分を喜ばせるためにやっているんです。



「靴底で集めたヨーロッパ」1984年ごろ。ヨーロッパ100日(非売品)

そんな自分のためにやっていることに興味を持ってくれたのが、作家の赤瀬川原平さんや建築史家の藤森照信さんたちです。彼らが興味を持ってくれたもののひとつに「靴底で集めたヨーロッパ」というのがあるのですが、これは、ヨーロッパを歩いているときに、足を痛めないよう靴の底についていた小石をはじくりだしたことがきっかけ。石たちを眺めているうちに、捨てちゃうのもったいないなあ、と。実際、ピンに詰めて飾ってみたら、それぞれの街の色が感じられて、なかなか美しい。そういえば、「靴底で集めたヨーロッパ」ってタイトルをつけてくれたのも赤瀬川さんだったかな。赤瀬川さんとの出会いは、僕にとって本当に偉偉でした。このまま僕のやりたいと思うことを続けていっていいんだ、と思えるようになったんですから。

## 3

自分なりにものを見て、ピントを合わせる。  
そこから何かが生まれるし、楽しみも広がる。

その後、『サライ』と『毎日グラフ』で連載がスタートするわけですが、どんな記事を書いておられたのですか?

とにかく思いついたことを、誰もやっていないこと書いてみようと考えていたかな。雑誌の仕事がくる前に、アイデア帳にやりたいをパツと書いていたんですよ。だから、実は、それを順番にこなしただけっていうか。最初に書いたのは、夏目漱石の「吾輩は猫である」の猫のこと。これは、実際に漱石が飼っていた猫で、漱石の奥さんの文章に、真っ黒い猫だって書いてあったんです。文京区の干駄木で飼っていて、早稲田に越すときに連れて行った。もともと野良の雄猫だったというので、その周辺で子孫がいるんじゃないかと考えて、探しに行きました。そういうフィールドワーク的なことって誰もやっていない。そしたら、真っ黒いのがいましたよ、すぐ近くのお豆腐屋さん。僕は、絶対、あいつだと思えます(笑)

結局のところ、何を思いつくか、がスタートになるんですね。そのひらめきが「起承転結」でいえば「起」。といっても、僕は筋が通ったことが苦手で、いつも「起承転結」なんです(笑) どうしたら面白くなるか考えて、文章と写真やイラストとで表現することが「承」や「転」。あえて

いえば、人によって違う見方こそ「結」ですかね。作品を見る人にも「こんなふうにも見える」「あんなふうにも見える」といろいろな捉え方をしてほしいです。

僕はアイデア帳をつくっていますけど、何か表現したい人は、そういうものがあるといいですね。記録しておく、その中には自分自身の何かが入ります。記録しなかったら、自分が感じたことも忘れちゃう。人によって見る部分は違って、どこにピントを合わせるかはそれぞれだけど、ピントは合わせなきゃダメなんですよ。曖昧に見ていたらぼんやりするだけで、その先の広がりがない。1回ピントを合わせる作業をすると、自分が気に入ったものにピントが合うようになるし、楽しみも広がります。



## 4

自分のためにやっていることなんだけど、  
ほかの人が喜んでくれたら、それもまた楽しい。

SUTでは「旅の絵日記 ―エハガキの愉しみ3―」が人気なのですが、絵はがきについてお聞かせください。

ももとは、入院中だった漫画家の杉浦日向子さんを励まそうと絵はがきを出したのがきっかけです。その後、旅先から家内に、僕が元気でやっているということを知らせ

るために書くようになりました。家内宛だけで100枚はあるかな。どうせ書くなら、家内が楽しんでくれたらいいな、そのために僕も旅を楽しもう、そんな気持ちでした。

いわゆる絵はがきのものっていうのは、観光絵はがきじゃないですか。それはそれでいいんだけど、誰もが気がつく素晴らしいものじゃなくて、僕は、目立たないなかに小さな光を放っているものに気づいて、それを知らせたい。その土地の暮らしが見える何かとか、ね。



「旅の絵日記 ―エハガキの愉しみ3―」より

今はSNSでアップしたりもしていますが、それらは絵はがきみたいに残らない。自分の手を実際に動かして表現するという時間をかけて、それに気持ちを乗せるっていうのは、デジタルの画像とは絶対に違うんじゃないかな。見る人にとっても、こういう手ざわりの感覚みたいなものは、すごく面白いと思うし、何かしらが伝わるとしています。

## 5

アトリエは、いわば僕の頭の中。  
どんなふうに展示してもらえるか楽しみ。



2022年9月21日撮影・取材時、アトリエにて(展示販売予定)

最後に、アトリエについて伺います。終活として、アナログ的に整理していた資料をデータ化なさっているとか。

現在は、いわば“第一次”の終活で、ほぼ半分整理が終わっています。PCがない時代は、全部コピーして、新聞記事なんかはA4にひとつの記事を入れるようにして分類していました。これが膨大になってしまっ、処理できなくなったんですよ。項目だけでも2,000ぐらいあるし、どんどん細分化していくうちに、要素もさらに増えていく。なので、スキャンしてデータ保存するようにしたんです。具体的には、新聞記事は項目だけで18万件入っています。明治の資料に関しては14万件。それらが、いまは検索すればいつでもすぐに取り出せる。PCに保存するようになって、部屋の中の棚を全部なくすことができました(笑)。

この終活は、僕ひとりで行っているわけではなくて、家内が手伝ってくれているんです。いや「手伝う」じゃなくて「一緒に」かな。二人三脚っていいもいくらい。「えーっと、あのときのあれは…」なんてことは、家内のほうがよくわかっているかも。ほんとうに、有難い存在です。それと、あのときの僕の直感にも感謝ですね(笑)

僕にとって、アトリエは、自分の頭の中を分類・整理した棚と同じなんですよ。アイデア帳の大きかりなものっていうか。だから、PCで膨大な量が処理できるようになって、本当によかったです。今回SUTさんのイベントで、僕のアトリエを再現してくれるというので、どんな展示になるのか、僕自身すごく楽しみにしています。



2022年9月21日撮影・取材時、アトリエにて、奥様節子さんと